

国宝 大法寺三重塔



アクセス

上信越自動車道 上田菅平ICより 車で30分
 長野自動車道 麻績ICより 車で30分
 JR上田駅 千曲バス青木線乗車(上田駅お城口1番乗り場)
 当郷バス停下車 徒歩15分 殿戸バス停下車 徒歩20分

拝観時間

9:00~17:00 (4月から10月) 9:00~16:00 (11月から3月)

拝観料

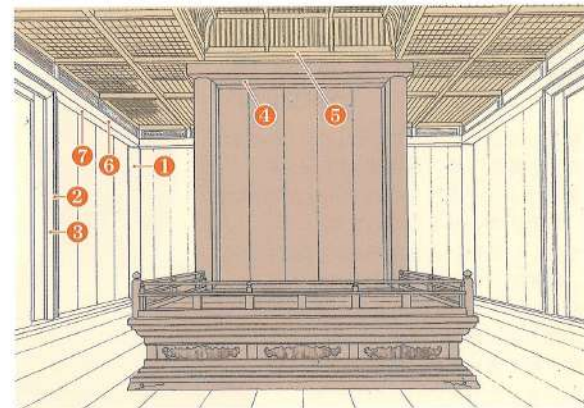
大人 300円 小中学生 100円

特別拝観(要事前予約) 700円 (十一面観音菩薩・普賢菩薩・日本最古の龕)

大法寺お問い合わせ

〒386-1603 長野県小県郡青木村大字当郷 2052

☎0268-49-2256 office@daihoujitemple.com

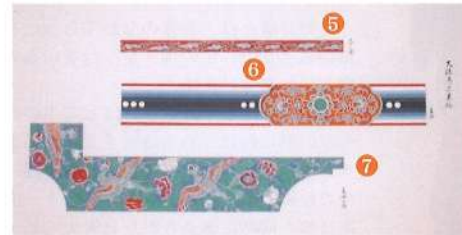
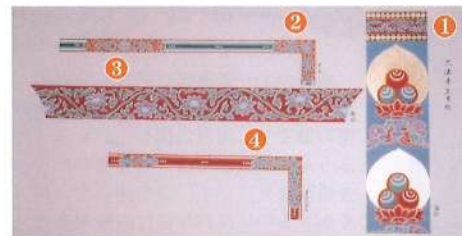


三重塔初重空間の彩色画

大日如来を安置する初重空間は、建造初期のころに彩色画のあったことが知られていました。

近年に復元的調査が実施され、内法長押、弊軸、天井蟻壁および隅柱などの彩色図形が確認されました。これを期に文化庁の依頼を受けた、古絵様復原作者、馬場良治氏によって住時の彩色絵が紙面に復原されました。古代後半から中世、近世まで仏塔の初重は仏堂化し、正規の三間堂のように荘厳されるようになりました。

この塔の彩色は専門用語でいうところの縹網彩色や唐草紋、宝相華、瑞鳥などを配し、仏世界を表現しています。



<三重塔の規模>

高さ 礎石上端から宝珠上端まで 61尺2寸7分(18.56メートル)
 建坪 初重4.06坪 二重2.35坪 三重1.75坪 計8.16坪
 国宝指定 昭和28年3月

青木村・青木村観光協会

青木村役場内 〒386-1601 長野県小県郡青木村大字田沢111番地
 ☎0268-49-0111(代) <http://www.vill.aoki.nagano.jp/>

木造十一面観音立像

(重要文化財)

桂材一本造り（木を寄せないで一本の木で造る）の彫眼で像の高さは171cm。

お顔はふっくらとしていて古風で気品に満ち、慈悲円満の相をしています。

やさしい表情に衣文を刻んだ刀法などから、藤原時代の中頃の作とみられます。

頭上には仏面10体があり、頭丁に仏面、頭上の正面側に菩薩面3面（慈悲を施される面）、左側に瞋怒面3面（悪い行いをしたときに怒られている面）、右側に狗牙上出面2面（善い行いに牙を出して笑い喜ばれている面）、拝観者からは見えない背面に大笑面1面（あざけり笑う顔を慎むべきとして後ろに造られた面）を表しています。

※ 拝観は別途料金、要予約。



木造伝普賢菩薩立像

(重要文化財)

本尊の十一面観音と同じく桂材の一本造りです。彫眼で像の高さは107cmの小型の像です。両目は閉じ、しもぶくれのふっくらした面相は、上品でやわらかな表情になっていて、頭の頂の高い髻（冠をかぶるのに便利な様に頭髪を束ねたもの）が目立ちます。

普賢菩薩とは、菩薩のなかでもっとも賢い仏とされ、仏の理・定・行を司る菩薩といわれています。

この像は、左手は下に伸ばして手のひらは内側に向け、右手は臂をまげていますがその先は欠けています。面相の彫りや衣紋線のおとなしきなどから、十一面観音像と同時に像造されたと考えられています。

※ 拝観は別途料金、要予約。



観音堂厨子及び須弥壇

(重要文化財)

この厨子と須弥壇は正規の禅宗様式の小建築です。様式は新仏教の禅宗とともにわが国にもたらされた建築様式を言います。その特徴は柱が細く長くなり、斗拱（組物）が複雑化し扇垂木の軒も大きく反り上がります。

須弥壇も彫物が多用され、華やかさが増していきます。禅宗様式は以前に唐様といわれたが、これは唐時代の様式ではなく、宗時代の様式のことを指します。この様式は請来後に禅宗以外の宗派の建築にも受け入れられてきました。この厨子及び須弥壇もその一例であり、和様の三重塔との対比が興味を増します。これら一具の厨子等は作製年代は明らかではないが、技法と意匠からみて、室町時代前期頃と推定できます。

ただし、正面の棧唐戸は江戸時代の後補と考えられています。



日本最古の鯰

厨子の頂上大棟両端には鯰の棟飾りが付いています。この鯰は江戸時代のそれとは異にし、大棟端を啜る中国様式の「吻」形式です。吻は飛鳥時代の大坂四天王寺にみられる「鵝尾」の発達形です。この厨子の鯰は、わが国で吻の形式を残す中世の作として現存する日本最古の鯰とも言われています。

大法寺と国宝三重塔

大法寺の創建は伝承によると、遠く飛鳥時代の大宝元年（701）とされていますが、明らかなことは分かっていません。この大宝元年説に従ってみると白鳳時代（美術史の年代で飛鳥時代後期にあたる）の寺院伽藍は天智天皇ゆかりの崇福寺を除いて山地に建立することはありませんでした。また、この時代にはまだ天台宗は伝来されておらず、国家鎮護の奈良仏教の時代でした。その後、平安時代に入り延暦24年（805）最澄によって天台宗が広められました。

天台宗寺院は比叡山延暦寺のごとく、伽藍を山岳に求めて堂塔を散在させるという不定形化がみられます。

大法寺も規模こそ小さいが、山地の中腹に本堂、観音堂、三重塔を斜線状に配置します。参道は山地裾の平坦地の小字名「窓門」あたりから観音堂（大悲閣）に向かって真っ直ぐに延び、堂内に本尊の十一面観音像が厨子内に安置されます。

この観音像は平安時代中期の作とされているので、その頃までには天台宗大法寺が造立されていたとみることができます。

三重塔は明治32年に古社寺保存法により国宝に指定されたのち、昭和28年に文化財保護法の新法により、改めて国宝建築物に指定されました。指定の正式名称は「三間三重塔婆、桧皮葺、一基」です。

これより先き、大正9年に解体修理が行われ、このとき軒下の斗拱（組物）から正慶2年（1333）の墨書年号が発見されて建造実年代が判明しました。

仏塔建築がわが国に請来された初期のころは仏陀の舍利（遺骨）を奉安したストウパ（卒塔婆）の日本化したものでした。これが奈良時代には寺院を荘厳する塔となり、つづく平安、鎌倉時代には初重空間が塔の本義を離れて仏堂化し、仏壇を構えて全面に色彩が施されるようになります。この形式は以後室町、江戸時代へと引継がれました。

大法寺三重塔は国宝指定13基のうち、その建造年代は比較的新しく、小型で繊細な塔婆は親近感があり、また、次代への先駆的技法が見られます。この塔の様式はわが国古来からの「和様」で建てられ、女性的で優美な姿は何時のころからか、「見返りの塔」として旅人や里人から親しまれてきました。

